

教材・資料編

※授業順は、ワークシート (WS) 1 step1→WS 2→WS 1 step 2～5 (3)→参考資料→WS step 6

1 ワークシート1 百年戦争と14～15世紀の英仏

step 1 封建的主従関係と中世社会の流れを確認

問 図A Bで国王が直接、農奴に賦役・貢納を納めさせることができた範囲に○印をつけなさい。
(図Bはフランス王が賦役・貢納を得た範囲)

図A <封建的主従関係>

『ニューステージ世界史詳覧』(浜島書店)
p. 143 「封建制の構造」の図を利用

荘園の不輸不入権・領主裁判権を復習し、中世封建制の特色を確認させる。

図B<14～15世紀の西ヨーロッパ>

『ニューステージ世界史詳覧』(浜島書店)
p. 150
1 「百年戦争前の英仏関係」A,
2 「百年戦争前期のフランス」の地図を利用

図Aを踏まえ、フランス王の勢力拡大と、百年戦争前期における主な諸侯領を確認させる。

参考：図説資料<十字軍の原因と影響> <封建制の崩壊・中央集権国家の成立>

『ニューステージ世界史詳覧』(浜島書店)
p. 145
1 「十字軍の原因と影響」の図を利用

十字軍以降の中世後半から近世への流れが、中央集権国家の成立にあることを確認させ、その事例の一つが百年戦争であることを認識させる。

『ニューステージ世界史詳覧』(浜島書店)
p. 148
1 「封建制の崩壊・中央集権国家の成立」の図を利用

step 2 資料読解 → 別紙 ワークシート2

step 3 資料を比較 【比較】

- (1) 資料A～Eの内容を代表者が発表する。
- (2) 各グループで資料A～Eをまとめた図を見比べて、違いを確認しよう。
→ 気付いた点にはアンダーライン等の印をつけておく。
- (3) 資料A～Eの書き方(書いた人のねらいや視点)にはどのような違いがあるだろうか？

step 4 百年戦争って何だ？→「百年戦争」でいいのか？

Q 1 そもそも「百年戦争」とはいつ名付けられたのか？

A 1 「百年戦争」の語は19世紀に初めて用いられる。それまでは特別な名称はないと思われる。

Q 2 百年戦争での有名人といたら、エドワード黒太子とジャンヌ=ダルク？

A 2 ジャンヌ=ダルクを現在のように評価したのは、ナポレオン1世。
エドワード黒太子がイギリス（イングランド）で有名になったのも19世紀。

Q 3 イングランドとフランスはいつ分かれた？

A 3 1822年のアミアンの和約で破棄するまで、イングランド国王はフランス王を名乗っていた。

↓

☆19Cとは… ナショナリズムが高揚＝イギリス・フランスという「国民国家」の存在が大前提に

step 5 百年戦争に別の名前をつけるとしたら…？

(1)戦争の名称の命名パターン

- | | |
|-----------------|--|
| ア 交戦した国名をもとにつける | ex. 英蘭戦争・普仏戦争・ペルシア戦争・ポエニ戦争など |
| イ 戦争の期間や規模に由来 | ex. 三十年戦争・七年戦争・第一次世界大戦・第二次世界大戦 |
| ウ 戦争の争点や主な戦場に由来 | ex. アメリカ独立戦争・イタリア統一戦争・オーストリア継承戦争
アヘン戦争・アロー戦争・クリミア戦争など |

(2)どんな視点から「百年戦争」を見るか？の考え方のヒント [思考を活性化させる発問]

参考 百年戦争で、イングランドとフランスはどのように変化していったのか？

「現代の歴史学では、百年戦争という表現はかならずしも歓迎されていない。その理由の一つにはこの表現が中世末期の王家の争い、王朝的な争点を強調することになり、この戦争をあたかも王位継承戦争であるかのように見せかけることになり、この戦争の真の性質を誤解させることになるからである。」

「(英仏)両者はそれぞれ、ほとんど完成された国であるようにみえながら、繋がっており、完全に別個の国にはなっていないのである。さらにそれは、一方が他方を支配しているとか、一方が他方に侵入している、とかいった関係とは違う。両者は繋がっており、もつれあい絡みあっていたのである。これをいわば一刀両断に切り離す、外科的大手術の働きをしたのが百年戦争だった」(『百年戦争』城戸毅(元名古屋市立大教授))

①18世紀以前の人なら、「この戦争」をどう記述するか？

- ・ヘンリ4世以前のイングランド王には「イングランド(イギリス)人」意識はなく、フランス語やフランス文化が重視されていた。フランス語を話せない最初のイングランド王がヘンリ5世と言われる。英語しか話さないヘンリ5世はイングランド人として即位した最初のイングランド王とも言える。
- ・チョーサーが『カンタベリー物語』を英語で著し、イギリスにおけるルネサンスの先駆となったのがヘンリ4世時代。
→ヘンリ4世までは「フランス王」を主張する権利がある？
ヘンリ5世がフランス王を主張するのは、先祖伝来の領土奪還ではなく、外国侵略？

②イングランドから見ると ～シェークスピア史観

- ・シェークスピアは16世紀末、エリザベス1世のもとイングランドの国力が向上した時代に多くの作品を発表
- ・シェークスピアは『ヘンリ5世』で、ヘンリ5世をイングランド史上最高の名君と讃える
→イギリスでは現在も「アザンクールの戦いに勝利した後、トロワの和約でヘンリ5世がフランス王シャルル6世の娘と結婚し、まもなく戦争はイングランドの勝利で終結した」と信じる人もいる
(ロビン・ネイランズ『百年戦争』1890・「シェークスピア症候群」)
→この場合、バラ戦争の影響で、ヘンリ6世が大陸の領土を失ったことになる

③ヨーロッパの人々はどう捉えているか ex. 「ヨーロッパ連合」の視点から見ると？

④国家ではなく、民衆の視点から見ると

・なぜ、ジャンヌ=ダルクの「フランスを救え」は人々の共感を得たのか？

⑤「中世」や「近世」といった時代区分を意識すると

・14～15世紀は「中世」の終わり。「近世」のキーワードは中央集権化（絶対王政）→具体的に何が変わった？

→①～⑤の視点をもとに、自分なりに考えるために、参考資料『欧州共通教科書』を見てみよう（ワークシート1裏面・原寸はA3サイズ）

(3) (1)の命名パターン「ウ」を参考に、「百年戦争（とその時代）」に新しい名前をつけるとしたら…？

・参考にした視点 _____（ _____ ） ←(2)の①～⑤, 【思考】
その他の場合は（ _____ ）に視点を記入

・新しい名前（ _____ ） ※「〇〇戦争」でなくてもよい 【要約・表現】

・命名の理由 _____

step6 学んだことのまとめ

課題 ヨーロッパの歴史教科書を読んで、自分がつけた名称を基に、その内容をメモリーツリー形式でまとめなさい 【要約・表現】

(まとめ図) ※キーワードは最低15個以上用いること (原寸はA4サイズの3/4程度)

(1) step5 (3)とこの(まとめ図), および下記(振り返り(2)(3))で期待される生徒の変容例

・百年戦争を、単なる英仏間の対立として見るのではなく、より広い視点から理解する。
(「主権国家」「近代国家」の前提から離れた視点で、歴史事象を捉えることができる。)

例1: 教皇・神聖ローマ皇帝や近隣諸国の動向を踏まえ、全ヨーロッパ的な視点で捉える。

例2: 「絶対王政」的な統一国家の対立ではなく、諸侯間の対立に着目できる。

ex. 現在のルクセンブルクの祖となるブルゴーニュ公の盛衰

例3: ペスト・ジャックリーの乱に加え、教皇権や皇帝権の衰退、騎士諸侯の没落などを踏まえて、中世後期の変動を百年戦争の中に見いだすことができる。

・百年戦争の「結果」として、近世的なイングランド・フランスが誕生したことに気付く。

(2) 評価にあたって、ポイントとなると思われる点 [獲得した力の「見える化」・自己評価]

・step5 (3)の新名称が、上記の「期待される生徒の変容」に即していること。

・新名称と(まとめ図)の内容が、関連していること。

(生徒の理解が不十分だと、両者が遊離した内容となる)

・下記(振り返り)で、他者の意見を尊重し、評価しつつ、自分の思考をより深めている。
また、学習前と学習後での自分の認識の変化を、具体的に表現できている。

(振り返り)

(1) step 5 (3) や 6 に取り組んだ際に意識した点や工夫した点は何ですか？ (箇条書きで可)

(2) 他人のネーミングやまとめ図の発表を聞いて (見て) , よいと思った点や気付いたことを書いて下さい。(箇条書きで可)

[他の生徒がつけた名称や, まとめ方を見て, 自分の視点を客観化させる]

(3) 自分のワークシート 2 (事前にしたまとめ図) と左の step 6 を比較して, 自分が新たに学んだ点や気付いた点を書いて下さい。(箇条書きで可)

[自己評価] 【メタ認知】

2 ワークシート2 百年戦争の記述比較

[事前学習] [選択判断の基準となる効果的な資料の提示1] 【比較】

(資料比較 生徒には5人1班へ資料A～Eの5種類のプリントを配付)

次の資料文を読んで、内容をメモリーツリー形式（普通の授業のまとめファイルで書いている形式）でまとめなさい。

- <注意事項>
- ・資料の太字とアンダーライン部の語句を必ず用いること。
 - ・図説 (p. 148～151) と用語集 (p. 105 ほか) は参考にしてもよいが、教科書・その他資料（インターネット等）は参考にしないこと。
 - ・資料はA～Eまで5種類ありますが、異なる資料は見ないこと。
 - ・まとめる際は、「百年戦争の原因・展開・結果」と「英仏への影響」が分かるように書くとよい。

資料A

フランス国王は毛織物産地として重要な**フランドル地方**を直接支配下におこうとしたが、この地方に羊毛を輸出して利益をあげていたイギリス国王は、フランスがこの地方に勢力をのぼすのを阻止しようとした。**カペー朝**が断絶して**ヴァロワ朝**がたつと、イギリス国王**エドワード3世**は、母がカペー家出身であることから**フランス王位継承権**を主張し、これをきっかけに両国のあいだに**百年戦争**が始まった。

はじめ**長弓兵**を駆使したイギリス軍が、**クレシーの戦い**でフランス騎士軍を破るなど優勢で、**エドワード黒太子**の活躍によりフランス南西部を奪った。フランス国内はさらに**黒死病**の流行やジャックリーの乱などで荒廃し、**シャルル7世**のときには王国は崩壊寸前の危機にあった。このとき、国を救えとの神の託宣を信じた農民の娘**ジャンヌ=ダルク**があらわれてフランス軍を率い、**オルレアン**の包囲を破ってイギリス軍を大敗させた。これよりフランスは勢いをもりかえし、ついに**カレー**を除く**全国土からイギリス軍を追い出し**て、戦争は**フランスの勝利**に終わった。この長期の戦争のためフランスでは**諸侯・騎士が没落**した。その一方でシャルル7世は**大商人**と結んで**財政をたて直し**、**常備軍**を設置したので、以後、**中央集権化**が急速に進展した。

一方、戦後のイギリスでは**ランカスター・ヨーク両家**による**王位継承の内乱**がおこった。これを**バラ戦争**という①。イギリスの**諸侯・騎士**は両派にわかれて激しく戦ったが、その結果、彼らは**没落**した。結局内乱をおさめたランカスター派の**ヘンリ**が1485年に即位し（**ヘンリ7世**）、**テューダー朝**を開いた。彼は統治制度をととのえ②**王権**に反抗するものを処罰して**絶対王政**に道を開いた。他方、ケルト系の隣国**ウェールズ**は1536年にイギリスに**併合**されたが、**アイルランド**と**スコットランド**はなお独立を保ち続けた。

①両派の記事がそれぞれ赤バラと白バラであったとする後世の想像から、こう呼ばれる。

②ヘンリ7世の後を継いだ国王ヘンリ8世の治世には、17世紀半ばのイギリス革命で王権乱用の象徴として廃止されることになる**星室庁裁判所**も整備された。星室庁裁判所という名前は、裁判がウェストミンスター宮殿の「星の間」でおこなわれたのに由来するとされる。

資料B

14世紀にはいると、プランタジネット朝のイングランドとヴァロワ朝フランスとの関係が、イングランドの在仏所領をめぐって緊迫した。両国の武力衝突は、イングランド王エドワード3世のフランス王即位宣言（1340年）とともに本格化し、戦闘と休戦をくりかえしながら、100年以上にわたり決着をみなかった（**百年戦争**）。当初はクレシーの戦いで歩兵長弓隊がフランス騎士軍に勝利するなどイングランド軍が優勢であったが、1429年にジャンヌ=ダルクがオルレアンの包囲をとりてシャルル7世の国王戴冠（ランス）を実現すると、フランスの優位に転じた。戦争は、教皇・公会議による和平調停のきもなく長期化し、両国の財政を著しく疲弊させたあげく、ようやく1453年、イングランド軍の全面撤退（カレーをのぞく）によって終結した。

その後、イングランドは長い内乱の時代（**バラ戦争**①）に突入し、国内では、貨幣地代の普及により農民層が分解し、のちにジェントリと呼ばれる中小領主層や、**独立自営農民**（ヨーマン）層が新たに形成された。一方、ようやくイングランドを国土から排除したフランスでは、ヴァロワ朝のもとで中央集権化が進められた。

①ランカスター家とヨーク家の対立を軸とした王位継承戦争。1485年のヘンリ7世（在位1485～1509）の即位（テューダー朝（1485～1603）の創始）によって終結した。戦争の名称は、両家の記章を赤バラと白バラとする伝承に基づき、19世紀にうまれたものである。

資料C

フランスのカペー朝がたえて傍系のヴァロワ朝が跡をつぐと、イングランド王エドワード3世がフランス王位の継承権を主張してフランスに侵攻した。これが**百年戦争**のはじまりである。この背景には、毛織物生産のさかんなフランドル地方やワインの産地であるギューイエンヌ地方をめぐる両国の利害の対立があった。

戦局ははじめ、フランスの有力諸侯であるブルゴーニュ公国と同盟をむすんだイングランドが優勢であった。**黒死病**の流行やジャックリーの乱で疲弊したフランスは、シャルル7世が即位したころには降伏寸前にまで追い込まれていたが、神のお告げを受けたと信じる農民の娘ジャンヌ=ダルクがあらわれ、フランス軍の先頭にたってオルレアンの包囲をやぶると、戦局は逆転した。1453年、フランスはカレー市をのぞく全領土を回復して、戦争は終結した。

百年戦争の結果、フランスでは諸侯や騎士が没落し、シャルル7世は官僚制、常備軍、租税制度を整備することで王権の強化をはかった。一方イングランドでは、百年戦争ののち、王位継承をめぐるランカスター家とヨーク家がそれぞれに諸侯や騎士を従えて争う**バラ戦争**がおこった。これをおさめたランカスター派のヘンリ7世はテューダー朝をひらき、ウェストミンスター宮殿に星室庁裁判所を設けて貴族層の王権への抵抗をおさえた。こうしてイングランドとフランスは、領土をほぼ確定して中央集権体制をすすめることで、近世の主権国家へと移行した。

※ジャンヌ=ダルク～預言者として理解されたジャンヌは、オルレアンを解放したのち、イングランド側にとらえられ、女性にもかかわらず男性の服装をしたことを理由の一つとされ、異端として火刑に処された。しかし処刑直後から復権を求める声上がり、1456年に復権裁判がなされた。1920年に教皇により聖人に加えられている。

資料D

フランスのカペー朝が絶えて傍系のヴァロワ朝があとをつぐと、イングランド王エドワード3世はフランス王位の継承権を主張してフランスに侵攻し、のちに**百年戦争**とよばれる断続的な戦争がはじまった。背景には、自国産羊毛の輸出先フランドルへフランスが進出することをきらうイングランドの思惑や、大陸内のプランタジネット家領地をめぐる英仏両王家の対立があった。

はじめはイングランドが優勢で、15世紀に入ると、フランス国内は、イングランドと結んだ**ブルゴーニュ公派**とフランス国王派との内戦のような状態となった。ところが、神のお告げを受けたと信じる農民の娘**ジャンヌ=ダルク**が出現し、オルレアンの解放を機に、**シャルル7世**が反攻に転じると、フランスは**カレー市**を除く全領土を確保して、戦争は終わった。

フランスでは諸侯・貴族の力が後退し、王権が伸張した。イングランドでは百年戦争後、**ランカスター家**と**ヨーク家**とが王位を争い、貴族が両派に分裂して**バラ戦争**①とよばれる内戦となったが、ランカスター派の**ヘンリ7世**が收拾して**テューダー朝**を開いた。テューダー朝は**星室庁裁判所**②を設けて反抗をおさえ、王権強化への道を開いた。

※ジャンヌ=ダルク～ジャンヌは最後には異端の罪で火刑に処せられた。「救国の少女」として称賛されるようになるのは、19世紀末にフランス・ナショナリズムが高揚するなかでのことで、1920年には聖女として列せられた。

①ランカスター派を赤いバラ、ヨーク派を白いバラになぞらえることで、19世紀に広まった呼称である。

②国王に直属する特別裁判所。ウェストミンスター宮殿の星の間に設置された。

イングランドとフランスの間で起こった戦争は長期に及び、多くの諸侯が没落し、王権力が力を増していった。

1328年フランスではカペー朝が断絶し、ヴァロワ朝のフィリップ6世が王位を継承した。①1337年フィリップ6世がギューエンヌ地方②の没収を宣言すると、イングランド王エドワード3世は母親がカペー家出身であることからフランス王位継承権を主張し、百年戦争が始まった。③イングランド側はクレシーの戦いやポワティエの戦いで勝利し④終始優勢であった。戦場となったフランスは荒廃し、さらにペスト（黒死病）の流行や農民一揆がそれに追い打ちをかけた。しかし1429年イングランド軍に包囲されたオルレアンがジャンヌ=ダルク⑤の活躍で解放されると、フランス王シャルル7世は攻勢に転じ、1453年にはギューエンヌ地方の中心都市ボルドーを奪回して百年戦争を終結させた。イングランドはカレーを残して大陸の所領を失った。フランスでは長期間にわたる戦争で多くの諸侯が没落し、都市の大商人と手を結んだ王権が急速に力をつけた。

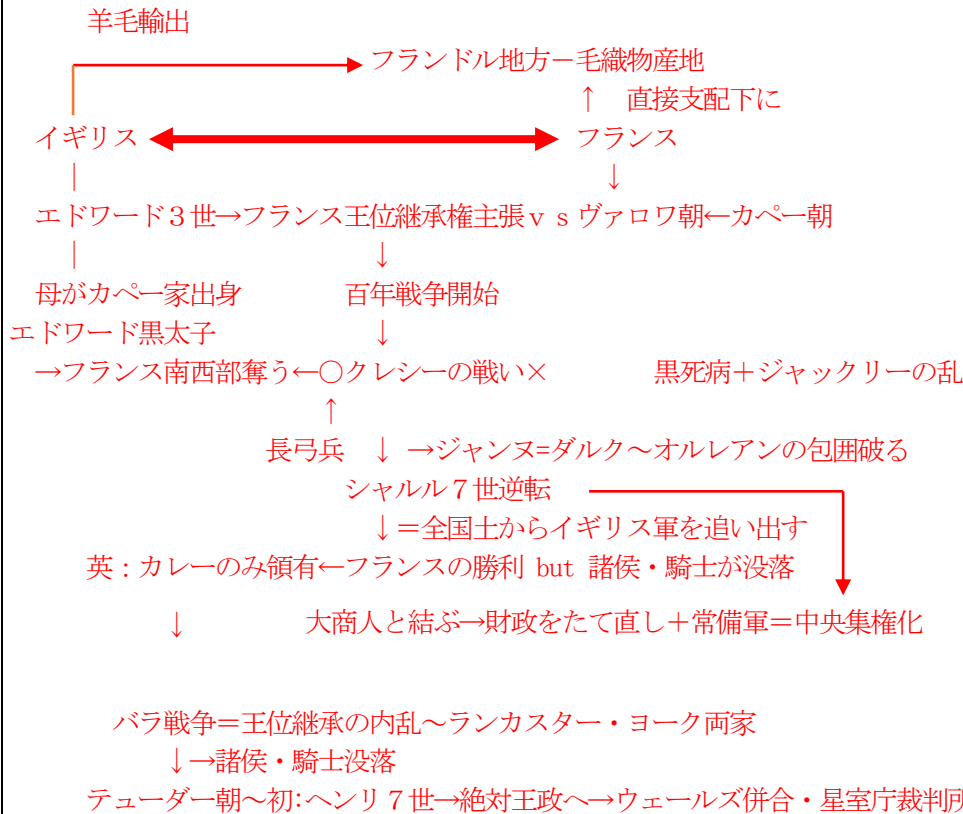
百年戦争で戦場とならなかったイングランドでも、その後、王位継承をめぐるランカスター家とヨーク家の間でばら戦争とよばれる内乱が起り、有力な諸侯が次々と没落していった。1485年に内乱をおさめてテューダー朝を開いたヘンリ7世は、王権に対する反抗を抑えるため、星室庁を整備した。

- ①イングランド・フランス王家（家系図解説）～封建社会では女性にも所領の相続権が認められており、相続権をもつ女性との結婚は所領を拡大するための重要な手段であった。そのため、王家や諸侯の間では複雑な婚姻関係が結ばれ、それがしばしば王位や公・伯位をめぐる継承戦争に発展した。
- ②ギューエンヌ地方～ガロンヌ川下流域のボルドーを中心とする地域で、プランタジネット朝のヘンリ2世以来イングランド王が領有していた。赤ワインの一大産地で、ワインを産出しないイングランドと経済的にも密接な関係をもっていた。
- ③百年戦争（地図解説）～フランドル伯でもあったブルゴーニュ公はイングランドと同盟関係にあったが、1435年にシャルル7世と和解した。これにより、イングランドとの同盟は解消された。
- ④ポワティエの戦い～黒太子エドワード（エドワード3世の長子）が指揮するイングランド軍はたくみな戦術で勝利し、フランス王ジャン2世を捕虜とした。
- ⑤ジャンヌ=ダルク裁判～ジャンヌ=ダルクはイングランド側にとらえられ、異端として火刑に処せられた。聖職階層制を無視して彼女が聞いたという神の声にのみ従おうとしたことや、男装したことが異端の理由とされたが、1920年に聖人に列せられた。

※資料A～Eの出典は、最後の「5 参考資料」の欄に記載

3 ワークシート2右半面 (予想される解答例の一例)

資料 A (A~E) サブタイトル イングランドとフランスの中央集権化への道



・メモリーツリー…今回の実践を行ったクラスの生徒は、毎授業ごとに交代で、授業内容をメモリーツリーでまとめる課題に取り組んでいる。おおよその生徒が、2回前後経験することで、やり方を身に付けることができている。慣れてくると、1回の授業をまとめるのに、15分から1時間以内でできるようになる。

まとめをする際に心がけた点・工夫した点は…

[歴史事象をまとめ、要点と関連性が他人に伝わるよう表現する際に留意する点を意識させる。]

まとめてみて疑問に思った点・もっと知りたい点などがあれば…

[疑問点等を出すことで、自分なりの単元に対する問いを立てさせる。]

- (予想される疑問例)
- ・なぜ、百年間も戦争状態が続いたのか?
 - ・エドワード3世にフランス王位を主張する資格があったのか?
 - ・英仏以外の他国や、諸侯はこの戦争にどう関わったのか?
 - ・なぜ、カレー市のみが最後までイングランド領であったのか?
 - ・ジャンヌ=ダルクの果たした役割は?なぜ、処刑されたのか?

4 ワークシート 1 step5・6 参考資料 [選択・判断の基準となる効果的な資料の提示]

※実際の実践では、「6 参考資料」を基に、百年戦争の略年表と人物紹介の補足紹介資料も用いて下記の資料を理解する学習活動の手助けとした。

※また、『欧州共通教科書』には下記以外に、身分制や社会制度、都市や農民に関する記述があり、生徒のたてた視点に応じて、適宜、個別に紹介した。

※「ジャンヌ=ダルク」「ジャンヌ・ダルク」の表記は、参考資料の表記に準じており、統一していない。

<『欧州共通教科書』の百年戦争の記述（第5章 危機とルネサンス 3「政治と行政」より）>

1 ヨーロッパの領土の変遷（本文・173ページの31行目～174ページの19行目）

（内容の概要）

- ・百年戦争は西ヨーロッパの国民国家形成に最も重要な役割を果たした。
- ・百年戦争は英仏だけでなく周辺諸国を巻き込み、その起因は純粋に封建問題であった。
- ・百年戦争の直接の契機は、フランス王フィリップ6世のギュイエンヌ奪回であった。
- ・この頃、新しい政治実体としてブルゴーニュが形成された。

2 百年戦争（173ページ・解説4）

（内容の概要）

- ・フランスでは、女系の王位継承権は認められておらず、エドワード3世の王位相続の主張は否認された。
- ・当初、イギリス側が優勢で、イギリス優位の和約が結ばれたが、フランス内部のアルマニャック派とブルゴーニュ派の抗争により再び戦端が開かれた。
- ・その後もフランス側は劣勢であったが、ジャンヌ・ダルクの奇跡的な働きもあり、体勢を立て直した。
- ・シャルル7世は内戦を終結させ、軍隊を再編し、1453年までにフランスからイギリス軍を一掃した。

3 封建国家から近代国家へ（本文・176ページの7行目～177ページ）

（内容の概要）

- ・12・13世紀の封建体制に由来する諸制度は、14・15世紀に新しい統治形態に取って代わられた。
- ・封建的主従関係が崩壊する中で、君主の利害は貴族個々の利害と一致しなくなり、全国民の利害と重なるようになった。
- ・新たな身分階層が形成される中で、都市の（富裕な）市民層の存在が明確になった。
- ・身分制議会の形成が進んだ。これは、各身分の特権を保障する役割を果たした。
- ・行政機構が個人間のつながりに基づくものから集団的連帯に基づくものへと移行する中で、のちに国民意識と呼ばれる感情を生み出す場合もあった。ただし、当時の「ナショナリズム」と見なされる感情は、「フランス王の臣下」などの限定的なものだった。
- ・王権が強化された国家の形成とともに、教皇やときに皇帝を後ろ盾にして結ばれたキリスト教世界の終焉が決定的となった。
- ・国王は官僚と常備軍を基に中央集権化を進め、富裕な商人は国王に資金を提供して軍備を増強させた。
- ・ブルゴーニュ公国は他国と異なる発展を見せ、最終的にフランス王家に敗れるものの、この国の諸機構は、のちにヨーロッパ各国に影響を及ぼした。

5 参考資料

(1) ワークシートに引用したもの

- ・『ヨーロッパの歴史 欧州共通教科書 第2版』
フレデリック=ドルーシュ総合編集・木村尚三郎監修・花上克己訳 東京書籍 1998
4「ワークシート1 step5・6 参考資料」に使用。ヨーロッパの12カ国14名の歴史家が執筆したもので、世界28カ国語に翻訳されている。内容は先史時代より現代までのヨーロッパ史を広く扱っており、図版・史料が豊富なため、ヨーロッパ史全般に参考となる。
- ・『百年戦争—中世末期の英仏関係—』城戸毅 刀水書房 2010（ワークシート1 step5ほか）
- ・『詳説 世界史B』山川出版社（ワークシート2 資料A）
- ・『新世界史B』山川出版社（ワークシート2 資料B）
- ・『世界史B 新訂版』実教出版（ワークシート2 資料C）
- ・『世界史B』東京書籍（ワークシート2 資料D）
- ・『新詳 世界史B』帝国書院（ワークシート2 資料E）

(2) ワークシート作成にあたり、参考にしたもの

- ・『英仏百年戦争』佐藤賢一 集英社新書 2003
- ・『カペー朝』佐藤賢一 講談社現代新書 2009
- ・『ヴァロワ朝』佐藤賢一 講談社現代新書 2014
- ・『世界史との対話 70時間の歴史批評（上）』小川幸司 地歴社 2011
- ・『世界の歴史 10 西ヨーロッパ世界の形成』佐藤彰一・池上俊一 中央公論社 1997

(3) メモリーツリーの作成法について

- ・第一学習社 Support Box <http://www.daiichi-g.co.jp/chireki/globalwide/box020.html>

(4) 映像資料 ※ジャンヌ=ダルクの表記はいずれも、原題（日本語タイトル）に合わせた。実際の実践では、一部クラスでは、映像資料を20分ほど用いて、生徒の理解の手がかりとした。現在では入手不能なものや、授業への利用が難しいものもあるが、参考として記載する。

- ・NHK『そのとき歴史が動いた』2003年9月10日放映分
「ジャンヌ・ダルク 戦いはわが愛の証～裁判記録が明かす聖女の真実」
百年戦争の概要とジャンヌ=ダルク裁判がコンパクトにまとめられている。本実践では、この番組の一部を利用した。（『NHK「その時歴史が動いた」コミック版 世界英雄編・ホーム社漫画文庫 2005）
- ・映画『ヴァージン・ブレイド ジャンヌ・ダルクの真実』（ジャンヌ・ダルク）カナダ 1999
上記、『その時歴史が動いた』の再現VTRで使われた、リーリー・ソビエンスキー主演によるカナダのテレビ映画。生徒が抱きやすい「聖なる乙女」「悲劇の少女」のイメージに近いジャンヌ=ダルク像である。日本語吹き替え版はVHSのみ販売されている。DVDは英語版のみ販売されている。
- ・映画『ジャンヌ・ダルク』フランス・アメリカ合作 1999
ミラ・ジョボヴィッチ主演、リュック・ベッソン監督の映画。ジャンヌ=ダルクを一人の少女として描いている。DVD・ブルーレイ共に入手可能。ただし、過激な描写が所々にあり、授業で用いるのには配慮が必要。